

自ら考え、工夫し、伝え合う力を育む保育

1 保育で願う豊かな学びの姿

以下は年長5歳児が、それまで自分たちが経験してきたことと幼稚園での遊びを結びつけ、学級のみんで「こどもまつり」の遊びを創りあげていった記録の一部である。(文中の☆印は、教師の意図的な環境の構成とはたらきかけを示す。)

実践事例「これはどう？それいいね」(5歳児)

11月4日 子どもたちも経験している、地域の秋祭りの様子を話したり、昨年度の「こどもまつり」の写真を提示したりし、子どもたちに「ほし組さんのこどもまつりをしよう！」と投げかけた(☆1)。すると、昨年やったお店をもう一度しようとする姿や「去年からこれをやりたかったんだ。」「つき組さんにお化け屋敷があったよ。どうなっているか見てみようか。」と、今まで自分たちがしてきた遊びや友だちの遊びを取り入れながら遊ぶ姿が見られた。

11月9日 園児A、B、Cは互いに誘い合い、お化け屋敷のチケットとお金を作っていた。「何回も来れるように、たくさん作った方がいいよ。」という園児Aの言葉に園児Bも賛同し、園児Cは「年少さんにも言ってくる。」と、年少の子どもたちを誘い始めた。この姿を見とった教師は、子どもたちの思いに沿いながら、他クラスの友だちや保護者など、お客さんを意識した「こどもまつり」となるよう、子どもたちに言葉をかけていった(☆2)。

また教師は、子どもたちが「こどもまつり」ではお店屋さんをするというイメージをもっているにとらえた。子どもたちのイメージが実現できるよう、子どもたちの思いや遊びの展開に合わせ、様々な材料を用意してきた(☆3)。

11月10日 魚釣り屋さんをしていた園児Dが、魚釣りに磁石を使用することを思いついた。それと共に、園児Dは磁石を使用するとたくさんくっついてしまうことにも気付いていた。「磁石じゃないものも考えてみる？」という教師の投げかけで、園児F「この前お父さんと魚釣りに行ったとき、針がこう(指を曲げて釣針の形にする)になっていたよ。」園児D「釣り針に引っかけて釣るようにしてみよう！」園児E「いいね。」と、それぞれのイメージを伝え合い、アルミホイルで作った釣り針を広告で作った竿につけ、魚の口に輪を着けて釣ることができるようにしていった。

11月14日 段ボールでお化け屋敷を作っていた園児Gの、「大きくするとすぐに倒れる」という悩みを、教師は学級全員の伝え合う場でとりあげた(☆4)。「困ったことがあるんだよね。」という投げかけに対し、園児Hが「知っている。すぐにベタンコになるんだよね。」と、園児Gの悩みをみんなに伝え、園児I「ガムテープで貼ってみたら?」「折れた線のところに、ガムテープを貼ったらいいよ。」と、その場でみんなが関わって、園児Gの悩みを解決しようとしていった。～中略～園児J「そうだ!もっと段ボールをつけようよ。K君たちがやっていたみたいに。」園児K「おろちの家を作ったときも段ボールをいっぱい貼ったよ。」園児I「段ボールを切るのはK君が上手だよ。」園児G「ガムテープを貼るのはL君が上手いね。」と、過去の経験を思い出し、それぞれの子どもが得意なことに手を貸しながら、みんなで課題を解決していった。

以上の事例から次のような経験や学びを捉えることができる。

子どもたちは自ら興味をもって「こどもまつり」に向かい、その過程で、今まで経験してきたことを遊びに取り入れたり、それをさらに良いものにしようと工夫したりしている。また、より良いものをつくろうとするときやうまくいかないとき、互いのイメージや考えを伝え合い、自分たちの力で実現できるよう取り組んでいる。子どもたちはこの事例の後も、「自分たちのお店にお客さんを招待しよう」という目的をもち、協同して「こどもまつり」を創りあげていった。本園では、このような、子どもが主体的に展開していく活動を通して求める豊かな学びの姿を、以下のように考えている。

- 興味・関心をもち、主体的に環境に関わって、疑問や不思議さに出会う姿
- 試行錯誤しながら気付いたり、考えたり、工夫したり、確かめたりする姿
- 自ら見つけたこと・考えたことを友だちと言葉で伝え合いながら、目的や課題意識をもって遊びを広げたり深めたりしようとする姿
- 友だちと目的を共有して、考えを出し合ったり相手の考えのよさを受け入れ合ったりしながら協同して実現しようとする姿

2 昨年度までの研究の経緯

研究初年度は、改めて「子どもをとらえる」ことを意識し直し、研究に取り組んでいった。その結果、自分なりのめあてをもって遊びに向かい、願いを実現しようとして繰り返す遊びの過程を、教師がしっかりと認めていくことで、子どもはより楽しさや達成感を味わうこととなり、遊びが継続されることが分かった。次年度からは、幼稚園における思考力・判断力・表現力をどうとらえ育てていくかということを中心に、研究を進めている。

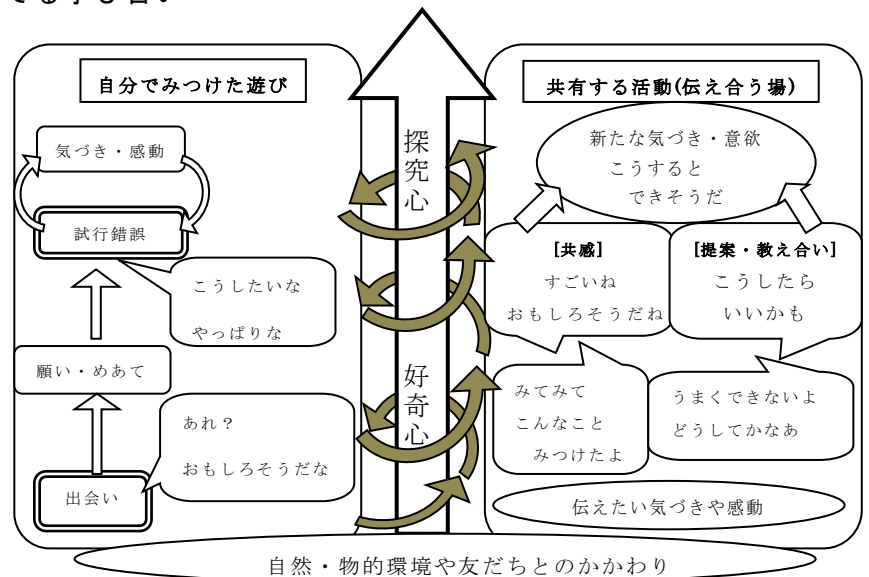
(1) 保育における思考力・判断力・表現力

本園では、保育における思考力・判断力・表現力を次のようにとらえている。

- 思考力・判断力…自ら興味をもって環境にかかわり、自分の願いを実現するためにどうすれば良いか考えたり選択したりする力
 - 表現力…感じたことや考えたことを自分なりの方法で表したり言葉で伝え合ったりする力
- 自分の願いを実現しようとする過程では、子どもは様々なことを試しながら思考し、それが遊びの姿として表れてくる。その遊びが充実することで学びが生まれ、個々の学びを共有させていくことで、思考力・判断力・表現力はより育っていくと考えている。

(2) 思考力・判断力・表現力を育てる学び合い

右の図は、思考力・判断力・表現力の育ちの過程をイメージしたものである。幼稚園における豊かな学びは、子どもが主体的に展開していく活動を通して求めるものである。そのため、個々の子どもの発達を十分に考慮して保育を構想すること、期のねらいと子どもの興味・関心に添った活動を、適機に子どもに投げかけることを第一とした。その上で、子どもが意欲的に遊び、学び合っているよう、「自分でみつけた遊びの充実」と「伝え合う場の充実」を図ってきた。



思考力・判断力・表現力の育ちの過程

学び合いへとつながるために、次の2点を意識した。1点目は、子どもが展開してきた生活や遊びをもとに、新たな発見や遊びの発展へとつながるよう、道具を用意したり場や活動を設定したりすることである。2点目は、個々の子どもの発見や願い、課題などを共有し、特に願いの実現、課題の解決に向けて、子ども同士が思いを伝え合う場をもつことである。

また、それぞれの子どもの願いを的確にとらえ、個々の子どもに合わせたはたらきかけをすることが、子どもが自らの願いを実現しようという思いをより強くもつことにつながると分か

った。その際、「なんでだろうね」「どうしたらいいかな」など、考えを掘り下げ、子ども自身に考えさせる言葉かけをすることが、遊びの発展へとつながっていった。

伝え合う場は、活動を展開する期や個々の子どもの発達、必要感などに合わせて設定した。特に年少では、学級全体での学び合いの素地として、教師や仲の良い友だちへ思いを伝えることや、少人数での伝え合いを大事にしてきた。このことは、それぞれの子どもが自分の思いを十分に出すことにつながっていったと考える。年長の伝え合う場では、多様な視点につながるよう、子どもによって異なるさまざまな気付きや考えを取り上げることも意識してきた。その結果、伝え合いが活性化したことに加え、少数派の友だちの気持ちにも目を向けることにつながった。このことから、どの願いや困ったことを取り上げるかということが、伝え合いの活性化や伝え合い後の遊びへの意欲の向上を図るための大きなポイントであることも分かってきた。

(3) 思考力・判断力・表現力の評価

本園では、一人一人の幼児の発達に対する理解を前提として、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めることを評価としている。予想されるそれぞれの遊びや活動において、思考力・判断力・表現力の育ちに特に深い関わりがあると思われるものを「見とりと価値づけの観点」として、子どもの姿で指導案に表した。前述の事例では、この視点をもって課題を取り上げ、伝え合いを展開したところ、自分たちで課題を解決しようとする姿につながった。このように、「見とりと価値づけの観点」をもつことで、はたらきかける場面や取り上げる課題が明確になり、より適切なはたらきかけができるようになった。子どもの変容と思考力・判断力・表現力の高まりは、日々の子どもの姿や言葉の記録を基に分析する。子どもの姿は前日と大きく変わる場合もあるが、思考力・判断力・表現力の高まりはすぐに姿として表れるものではないため、期を通して分析し、次の期の構想へと生かしている。

3 本年度の研究

(1) 気付きや経験したことをいかしている子どもの姿

昨年度までの研究を基盤に、本学校園では、学んだことをいかすことに焦点を当て、本年度の研究を進めていく。幼稚園では、子どもたちが思いついたことを試し、試しながらさまざまなことに気付いて遊びを面白くしていこうとする姿や、より良いものを求めて、自らの経験を基に以前とは違う判断をする姿がある。また、友だちのしていることを見て同じように遊びに取り入れたり、友だちの様子から場の雰囲気を感じ、同じ行動をしようとしたりする姿も見られる。これらのように、幼稚園では、子どもたちが日常の生活や遊びの中で気付いたことや経験したことをいかす姿が端々に見られる。本園では昨年度までの研究を踏まえ、「友だちとの関わりを通して気付いたことや経験したことを基に、自分の願いを実現しようとする姿」を「気付きや経験したことをいかしている子どもの姿」と捉えることとした。年長では「友だちと一緒に考えを出し合いより良いものを求める姿」、年少では「友だちの良い考えを遊びに取り入れる姿」に視点を当てていこうと考えている。

(2) いかしたくなる生活の構想

自分でみつけた遊びと、共有する活動、行事などを関連づけて構想する。例えば、自分でみつけた遊びで表れた子どもの気付きや感動などを共有する活動で取り上げ広めたり、遊びを共有して発展させ、運動会やこどもまつりなどの行事をつくっていったりする。さらに、共有する活動や行事で経験したことを、みつけた遊びのときにもできるように環境を整える。自分でみつけた遊びと、共有する活動、行事のつながりができることで、気付きや経験をいかせる機

会が多くなる。さらにその中での経験が、スパイラルにつながっていくことで、新たな気付きや意欲、試行錯誤へとつながっていくと考える。本園では、新たな考えを知ることや気付きが深まること、遊びが発展して行事へとつながるきっかけとなる場であることなどから、共有する活動を重視し、そのあり方を次のように工夫していく。

① 同じ経験をすることで「やってみたい」につなげる

「自分でみつけた遊び」での発見や面白い遊びそのものを共有する場をもち、他の子どもにも意図的に経験させていく。そのことが、子どもが新しいものに興味をもつことや、遊びをさらに面白くするためのヒントとなり、その後の遊びで、気付きや経験をいかす姿として現れると考える。

② 気付きや経験を伝え合う場といかしたくなる場を設定する

前述した様に、伝え合う場において、子どもによって異なるさまざまな気付きや考えを取り上げることは、子どもが友だちの考えに目を向けることにつながっていった。教師が意図をもって異なる考えを複数取り上げることで、子どもはより深く思考し、友だちの考えが良いことに気付き受け入れたり、自分の考えを確かなものにしていったりする。その後、伝え合って考えたことを遊びにいかせるよう、遊びに必要な場や時間を十分に確保していく。また、自分でみつけた遊びが発展し、遊んできたことがいかせるよう、行事との関連を考慮して伝え合う場をもち、普段の遊びと行事との関わりをもたせていく。

これらの共有する活動は、自分でみつけた遊びの中で、その場にいる数人で適機に考えや遊びを共有したり、後から学級全体で共有したりするなど、経験させたい内容や子どもの発達に応じて、共有する場や人数を変えていく。

(3) いかしたくなるはたらきかけ

子どもが遊びや生活の中で、気付きや経験をいかしているとき、無意識に行っている場合が多い。それを教師が見とり、良い考えをしていると認めることで、子どもが満足感を得ることにつながる。いかす経験を繰り返すことによって、さらに遊びが充実し、自分で考えたり工夫したり友だちと伝え合ったりして自分の願いを実現していく。そのことが、思考力・判断力・表現力の育ちにつながっていくと考える。

特に年少児は、いかそうとする思いはあってもうまく表現できなかつたり行動に移せなかつたりする場合があるため、手を貸したり励ましたりするなど、いかそうとする思いを実現させるようなはたらきかけが必要である。思いが実現し満足感を得る経験が先ず必要であり、そのことが、次の遊びへの意欲へとつながっていくと考えるからである。年長児に対しては、課題を解決できそうな以前の経験を提示したり、思い出したりするような声かけをしたりするなどして、以前の経験を課題解決や遊びの発展へといかせるきっかけをつくる。

4 成果と課題

子どもが願いをしっかりともっているとき、気付きや過去の経験をいかす姿が多くあらわれてくることが改めて分かった。願いを実現するために試したり考えを伝え合ったりしている姿を十分に認めていくことが、子どもが満足感を得、さらに意欲をもって願いの実現に向かうこととなり、その過程で思考力・判断力・表現力が高まってくると考える。

興味をもちにくい子どもがいる中での伝え合う場をどのようにつか、2学期以降、個々の子どもの興味や考えの違いを引き出しながら、運動会や子どもまつりなど、一つのことをどのようにつくり上げていくかということが課題となってくる。

(文責 内田 祐)